

I P M実践指標モデル（トマト）

管理項目	管理ポイント		チェック欄
	取組内容	メモ	
予防	施設内及びその周辺の管理	1) 換気装置、循環扇、暖房装置等を積極的に活用し、病害の発生しにくい温度・湿度管理を行う。灰色かび病の発生を抑制するには湿度80%を目標に管理する。	
		2) 施設内の地面のマルチングを行い、地面からの水分蒸散量を減少させ、施設内の湿度上昇を抑え、病害の発生を抑制する。	
	適正な品種の選定	3) 当該圃場で問題となる病害を把握し、抵抗性を有する穂木品種を利用する。	ウイルス病、葉かび病に対する抵抗性品種がある。
	適正な台木の選定	4) 当該圃場で問題となる病害を把握し、抵抗性を有する台木に接ぎ木を行う。	TMV、根腐萎凋病、萎凋病、青枯病、褐色根腐病、ネコフセンチュウ等に対する抵抗性台木品種がある。
	健全苗の育成	5) 病害・雑草が発生していない育苗圃場を選択し、病原菌に汚染されていない用土、鉢（消毒済みポット等）を使用する。	
		6) 育苗圃場に防虫ネットや近紫外線カットフィルム等を展張し、害虫の侵入や病原菌の孢子形成を抑制する。	タバココナジラミの侵入抑制については、0.4mm目合いの防虫網が適している。
	本圃の準備	7) 太陽熱土壌消毒、熱水土壌消毒、土壌還元消毒等を行い、土壌病害（ネコフセンチュウ、褐色萎凋病、萎凋病）の発生を抑制する。	
		8) 土壌病害の常発圃場において、耕種的防除で回避できない場合は土壌くん蒸剤を利用し、適切な土壌消毒を行う。	
		9) 病害虫発生圃場からの汚染土壌の拡散を防ぐため、圃場間を移動する場合は、農機具等を洗浄する。	
	本圃の施設	10) 施設の被覆資材には近紫外線カットフィルムを使用し、害虫の侵入と病原菌の孢子形成を抑制する（アザミウマ類、コナジラミ類、灰色かび病、菌核病）。	
		11) 防虫ネットの展張により、害虫の侵入を防止する。	タバココナジラミの侵入抑制については、0.4mm目合いの防虫網が適している。
	定植作業	12) 健全苗を選抜し、作型・仕立て方に応じた適正な栽植密度、本数を定植する。	
		13) 当該地域での例年の病害虫の発生状況を考慮して、定植時に育苗箱への薬剤施用が必要と判断された場合には、過剰防除にならないよう、対象病害虫のみに対して実施する。	トマト黄化葉巻病が継続して発生している地域では、感染を抑制するために、育苗期、定植期に粒剤施用を行い、予防的に媒介虫タバココナジラミの防除を行う。
	圃場衛生	14) ウイルス病を媒介しないよう、器具や手の洗浄等の衛生管理を行う。	
15) 葉かき、芽かき作業の残渣は圃場外へ持ち出し、適切に処分する。			
16) 発病株（土壌病害、かいよう病、黄化葉巻病）は、発見次第、早期に抜き取って圃場外へ持ち出し、適切に処分する。			
17) 施設周辺の収穫残渣はコナジラミ類の発生源やトマト黄化葉巻病の伝染源となるため、速やかに処分する。			

I P M実践指標モデル（トマト）

管理項目		管理ポイント		チェック欄
		取組内容	メモ	
	耕種的・物理的 防除技術の導入	18) 灰色かび病の発生源となる花卉や葉先枯れ、枯死葉等を除去する。		
		19) 黄色粘着板や黄色粘着シートを設置し、微小害虫を捕殺する。		
	栽培終了後の 作業	20) 施設内を締め切って害虫の施設外への逃亡を防止し、蒸し込みを行う。	蒸し込み後でも、施設内の雑草でタバココナジラミが生存している場合があるので、雑草を枯死させた後に蒸し込み処理を行う。	
	圃場周辺での 雑草管理	21) 施設内への雑草種子の持ち込みを防ぎ、雑草を発生源とする害虫（コナジラミ類等）の施設内への飛び込みを抑制するため、周辺の雑草防除を行う。		
	雑草対策	22) 地面のマルチングや敷きわらを行い、雑草の発生を抑制する。		
判断	病害虫発生予察 情報の確認	23) 病害虫防除所が発表する発生予察情報等入手し、確認する。	病害虫防除所のホームページアドレス <a href="http://www.mate.pref.mie.lg.jp/bojyosyo">http://www.mate.pref.mie.lg.jp/bojyosyo</a>	
	防除の要否の 判断	24) トマト黄化葉巻病の発生が継続する地域では、黄色粘着板でタバココナジラミが1頭でも確認されたら防除する。		
防除	生物的防除技術 の導入	25) 灰色かび病に対し、バチルス・ズブテリス剤等の生物農薬を利用する。	通常散布以外に、暖房機を使用したダクト散布が有効である。	
		26) うどんこ病に対し、ポーベリア・バシアーナ剤等の生物農薬を利用する。		
		27) コナジラミ類に対し、寄生蜂、微生物殺虫剤等の生物農薬を利用する。	ツヤコバチ類、ポーベリア・バシアーナ剤等が利用できる。	
		28) ハモグリバエ類に対し、寄生蜂等の生物農薬を利用する。	ヒメコバチ類等の寄生蜂が利用できる。	
		29) チョウ目害虫に対し、B T剤を利用する。		
	農薬の使用全般	30) 薬効が得られる範囲で用量を抑えた散布方法により、薬剤を散布する。	トマトサビダニなど局所発生する害虫に対し、発生初期にスポット散布で対応する。	
		31) 農薬散布を実施する場合は、適切な飛散防止措置を講じた上で使用する。	防虫ネット等をドリフト低減のネットに活用する。	
		32) 農薬を使用する場合は、特定の成分のみを繰り返し使用しない。さらに、当該地域で強い薬剤抵抗性の発達が確認されている農薬は、当該地域では使用しない。	灰色かび病、タバココナジラミ等に対して薬剤耐性菌、薬剤抵抗性系統が知られている。	
		33) マルハナバチや天敵を考慮した薬剤を選択する。		
		34) すずかび病の防除は、定植初期から予防効果の高い殺菌剤を散布する。	伝染源がハウス内に存在していると、定植直後から感染しやすい。T P N剤、マンゼブ剤は予防効果が高い。	
その他	作業日誌	35) 各農作業の実施日、病害虫・雑草の発生状況、農薬を使用した場合の農薬の名称、使用時期、使用量、散布方法等のI P Mに係る栽培管理状況を作業日誌として別途記録する。		
	I P M研修会等 への参加	36) 県や農業協同組合等が開催するI P M研修会等に参加する。		